

舟に帆をあげて

辻 憲男（文学部教授）

「高砂や…」と聞けば、かつては必ず結婚式を連想したものだ。謡曲「高砂」の主題は、大阪住吉の老松と高砂の姥松との遠距離・長生の夫婦愛。仲睦まじい相生松の精にあやかった船旅が、「高砂や、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出で潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり」のひとふしである。住吉は海の神、和歌の神。御みずから颯爽と、万代を祝いめでたく舞いおさめる。鳴尾はいま西宮市東南部。“遠くなる”と掛けている。

播磨の国はあちこちにふしぎな話があった。神代の昔、大和の三つの山が妻争いをした時、見物に来たのは印南国原（いなみくにはら＝加古川平野）だった。山どうしの争いに原が出ていった。一説には出雲の神様が仲裁にやって来たが、けんかがやんだと聞いて播磨にとどまったともいう。また加古川の三角州は、昔、王子に求婚された乙女が逃げ隠れた島なので、そこをナビツマ（隠び妻）といった。乙女はイナミノワキイラツメと言ひ、今は川東の日岡に眠っている（以上、万葉集、播磨国風土記）。

真夏の夜のこわい話と言えば、上田秋成の『雨月物語』の中の「吉備津の釜」だろうか。性悪の男が貞節の妻をだまし、他の女と出奔する。妻は亡霊となり、高砂の荒井まで追って来て恨みを晴らす。皮肉なことに、この美しい妻の名はおそろしい海の女神・磯良（いそら）と同じであった。



石の宝殿・生石神社（おうしこじんじゃ）の竜山。
6世紀末に物部守屋が造ったとの伝説がある。